

13 生命倫理と宗教

<創世記2>

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

<マタイ8>

18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」21 ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

1.土の塵から生きる者へ（神の息）

人間存在の有限性（他者へ依存した存在、生かされている）

2.現世中心（現世における生命の充実）と黙示文学（死後の生）

現在と未来との緊張 今の快樂を追求する刹那主義的生か、未来のために現在を犠牲にする生き方か

3.現世の生命の充実とは？ 神との交わり（本来的な人間関係の回復 = 神の国）

4.現代の問題状況：生命倫理の発生 問いとしての生命

科学技術の進歩と、選択の範囲の拡大（より自由に）

5.歴史における人間理解の変化（人間とは？ 人間学）

人間はいつから人間か？（人間はいつ人間であることをやめるのか？）

墮胎・幼児遺棄の問題

6.「子ども」誕生 人権の主体としての幼児

7.だれが、生命をめぐる最終的決断を担うのか？

本人？ 家族（家長・大人）？ 世間？ 国家？ 神？

8.キリスト教的原則：生命の最終決定者は神である

人間の恣意的な判断の禁止

9.自殺と安楽死

これは、個人の権利の事柄か？ 自分だけで生きているという意味の「個人」の抽象性

10.宗教における倫理的決断の構造：水平線と垂直線との交差

基準と状況（神の言葉と歴史）、原則と例外、決断する人間の有限性

11.脳死・臓器移植をめぐる宗教的問題（問題の宗教的次元とは？）

生命の価値を決定するのは誰か

権利は神に、しかし、人間が責任を問われる

存在することの意味（創造の善性）

「にもかかわらず」無意味ではない

他者の死への依存（人間は関係存在である）

12.欲望の実現は善か？

自由の限界：「他者危害の原則」（他人を傷つけない限りでしか、自己決定権は行使できない）だけでは十分ではない

自由も有限性を免れ得ない

13.臓器移植を肯定する精神性と宗教

システム以前（システムの根拠）の問題 隣人愛

< 1ヨハネ3 >

16 イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。

ポイント：隣人愛（心情の純粋性）

モデル・規範に照らした合理的判断

14.安楽死法的前提は何か？

15.自己決定原理とその後退

1990年代以降の臓器移植法改訂の動向

<ブックガイド>

1:ジェームズ・ヒルマン 『自殺と魂』（創元社）

2:村上陽一郎 『生と死への眼差し』（青土社）

3:波平恵美子 『医療人類学入門』（朝日新聞社）

4:荒井献 『問いかけるイエス』（NHK出版）

5:モルトマン 『人への奉仕と神の国』（新教出版社）

6:『ティリッヒ著作集7巻』（白水社）

7:大林浩 『死と永遠の生命 そのキリスト教的理解と歴史的背景』（ヨルダン社）

8:加藤尚武 『現代を読み解く倫理学』（丸善ライブラリー）